

異なる世代の話聞くことで自分のことがわかる

今回の対話では、他者の話を聞き、自分との違いを感じることを主眼におきました。他者と自分との違いを考えることで、自分自身が自覚なくもっていた判断基準や指針が浮かび上がってきます。普段話す機会のない他世代の方を対話相手にしました。

なぜ「ライフデザイン」をテーマに話すのか？



技術の進歩や少子高齢化、男女の役割の変化などにより、いまの子どもたちが仕事に就く頃には、現在存在しない職業が生まれ、働き方が多様化すると予想されています。教育期、仕事期、老後の3段階が基本だった人生も、人生100年時代になると、学び直し・副業起業などとたくさんの段階を経る可能性があります。お手本がないからこそ、主体性を持って自分の人生を決めていくプレッシャーと向き合うことになります。

ラボのコミュニティマネージャーの波柴純子さんは、「外的環境は脇に置き、自分の中に指針を求めてみよう。自分の経験や思考だけでは限界があるので、重要な他者との出会いが必要」と話しました。

事例紹介「ライフデザインラボをつくるまで」

船本 由佳さん

仕事に明け暮れた20代、結婚できない30代前半、結婚出産して子育てに悩む30代後半を経て、子育て環境の改善を考えるようになりました。それをきっかけに、異なる環境の人たちが集まってまちについて考える場所を作りたいとラボを作りました。

他者を理解するには、まず自分を理解！

自分をあらわす言葉を30個書き出し、その言葉をつなげて行う自己紹介。30個を絞りだすことで対話が活性化。



対話を通して自分の判断基準や指針が浮かびあがってきた

年代によって、過去・現在・未来でイメージする年齢が異なりましたが、考えの共通点や新たな視点があり、その意外性で盛り上がりました。「現状の働き方について語る40代」・「老後の準備を語る20代」・「ライフデザインを既に考えている大学生」がいて、各世代に対する思い込みに気づきました。他者の視点から自分の指針を考えるための選択肢の引き出しが増える対話となりました。



ふり返って -違いは世代ではなく個である-

最後に、全員で輪になり、本日の気づきや感じたことを順番に発表。「未来の世界は予測できないけれど、自分の信念や他者とのつながりは変わらず持っていたい」「共通認識と新たな視点が得られた」などの意見が出ました。ひとりひとりの発表に、違いは世代ではなく個であると改めて感じた時間となりました。

協力団体

あそびい横浜

パパ2人が起業して作ったお出かけ情報サイト

<https://asobii.net/>

横浜アクションプランナー(YAP)

地域参加の入り口を作る社会人サークル

<https://yap.actionport-yokohama.org/>